

MAD書店員の輪

54
人目



リプロ なんばウォーク店
服部健太郎さん

八尾店、鶴見店を経て、2018年9月からなんばウォーク店店長。「フレンドリーなお客が多いお店なので、レジ対応で元気を頂いてチャージしてます(笑)」。新刊情報はTwitter等で先取り入手。

多くの書店員の例に漏れず、服部さんも小説がお好き。「長嶋有さんとか堀江敏幸さんとか…。でも、読み終わらないまま仕事に行くと、続きが気になって気になって」。名残惜しくなってしまうのも本好きの性か。「小説だとその世界に心を持っていかれがちなので、もうちょっと読書と実生活をドッキングさせたいな」との思いから、近頃手に取るのはもっぱらエッセイだそう。

自らの暮らしと寄り添うような文章を求める服部さんのツボにハマったのが『みぎわに立って』。熊本[橙書店]の店主・田尻久子さんによる2冊目の随筆集だ。「1作目『猫はしっぽでしゃべる』で知った著者でしたが、お店(書店)のこのみならず、日常により近い目線で書いている文章がとてもいいんです」

続いて、「ずっと前に読んだのに、田尻さんが寄稿していることに最近気付いたんですね…」と頭をかきつつ取り出したのは、和田誠の装丁も鮮やかな『冬の本』。「冬と1冊の本」をテーマに書き下ろされたエッセイ集のなかには、作家、書店員、料理家、詩人…84人の言葉が詰まっている。ひとりひとりが紡ぐ言葉をじっくり味わう楽しみはもちろんのこと、「コートの内ポケットにぴったり厚みとサイズなので、撃

たれた時に守ってくれるかも」。…という服部さんの冗談はさておき、確かに珠玉の言葉たちは、現代社会でハートを

守るアーマー代わりにしてくれるかもしれない。

3冊目は『パリのガイドブックで東京の町を闊歩する』。名著をじわじわ読み進めるドキュメント仕立ての『「百年の孤独」を代わりに読む』で読書好きの間に風雲を巻き起こした友田とんの新作だ。タイトル通りの内容で、これまた独特のモノログが続くドキュメントだが…「めちゃくちゃ面白い。発売前からチェックしていて、本町[toi books]さんのオープン初日に購入。帰りの電車内で読んじやいました」

そう、服部さんは、他の書店にも意欲的にお邪魔する。「本屋さんが好きなので、“潜入捜査”みたいなことをしてる気持ちで仕事をしています。退職後に本屋さんに通うのが夢なんですけど、今はなかなか厳しい状況が続いているから、それがかなうか、少し心配」。今の仕事が、何十年後かの書店業界バトンをつなぐことになればいいと思いつつ、日々働いているようだ。

「僕は、本屋という場所を楽しむことは、本当に得意なんです」。仕事は未熟なんですけど……と笑う服部さんだが、一番の楽しみ方を知っている人が現場にいてくれるのなら、お客である我々にとって、幸運以外の何物でもない。



『みぎわに立って』
田尻久子/里山社



『冬の本』
天野祐吉 ほか/夏葉社



『パリのガイドブックで
東京の町を闊歩する』1
友田とん/
代わりに読む人



リプロ なんばウォーク店
[大阪・日本橋]

平日は19時以降がピーク、飲んだ帰りに立ち寄る人も多い。まさに“ウラなんば直結書店”と言えるかと。ビジネス・情報誌・文庫・コミックをはじめ、文芸書も展開。●大阪市中央区千日前1-5-7 なんばウォーク3番街北通 ☎06-6484-0910 10:00~22:00 休日はなんばウォークに準ずる